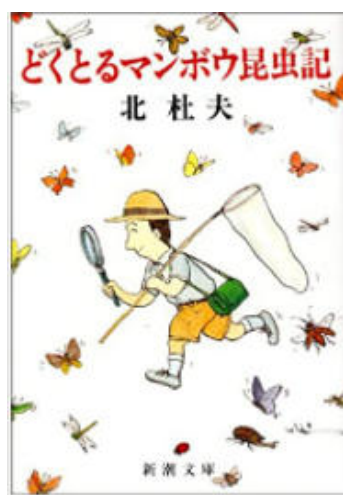


—虫(昆虫)を捕る子供と大人—

(文 岡本)

美しい花にモンシロチョウがとまっている。一陣の風が吹いてきた。蝶はふわりと風に乗った。幼い子供は花に見向きもせず蝶を追った。花の美しさがわかるには幼すぎるが、動くものには興味を持ち追いかける。人は採集捕獲本能を持っている。それは人類が生存するために不可欠のものだ。

子供は母から教えられるわけでもなく本能的に虫を捕らえようとするものだ。虫は子供の目から見て奇妙な形に見え、飛んだり跳ねたり予測のつかない動きをする。「捕らえた虫は羽をむしってもいいし、籠に入れて眺めてもいい。それは子供の自由で虫を踏んづけつぶしたからといって、あるいは虫にキスしてやったからといって、子供らの性格を云々してはいけない。好奇心(採集捕獲本能)、これが人類を最初にあやつってきた最初の力である」(北杜夫)。



都立小金井公園には虫が沢山生息する。なのに、捕虫網を振り回している子供は緑の公園の広さから想像するに、極めて少ない。父に連れられた子供を数人見るだけだ。ジャングルジムやサイクリングコースなどの人工施設には虫が群らがるように子供が蝟集している。

虫嫌いの若い母親には、虫虐待は教育上良くないとして、子供の虫への関心、虫捕りを抑える風潮があるようだ。北杜夫は「家が医者だったので古い注射器で蟻を含め随分沢山の虫を注射して殺し面白がっていたが、今の私はそれほど残忍ではない」と述べている。虫に残酷な仕打ちをしたからといってその子供が残忍な大人になるわけではない。その行為は、好奇心であって何かを知ろうという探究心からなされるものだ。酷く殺してやろうというより、踏んだら死ぬ、死んだらどうなるかということを学んでいると理解してやるべきだろう。

北杜夫(斎藤宗吉)は小学生4年の夏休みの宿題に昆虫標本造りを課されたのが昆虫に興味を抱いたきっかけだという。それが昂じて昆虫学者を夢見たが、太平洋戦争の末期には昆虫学者を口にするに“非国民”呼ばわりされた。そんな世相の中で収集した100箱の標本も空襲で灰塵となった。ファールのような道を歩んで博物学と文学を結びつけた本を書きたかったというが、父の歌人斎藤茂吉に反対されて仕方なく医学の道に進んだという。

養老孟司(解剖学者)などは物心ついた頃から生き物が好きだったという。蟹や魚なども好きだったが、結局虫に行き着いた最大の要因は、いくらでもへんちくりんな虫が発見できる虫の「多様性」と綺麗な標本で容易に貯えることができることだという。生き物好きが虫好きに収斂するのは、標本の要素が大きく、虫屋の奥本大三郎(仏文学者)や池田清彦(生物学者)も小学4、5年頃には標本造りを始めた。



山岳関連の随想で著名な串田孫一(注)は、「好奇心、これは幼少時代に自分のものにしなければならぬと思う。自意識とよばれる下らない見張りが付いてまわるようになると、好奇心はいじけてしまう。自意識を追い払うのは仲々難しい。」と述べている(「どくとるマンボウ昆虫記」の解説)。自意識に取り憑かれた大人が捕虫網を振り回すのはみっともなくできない。この点で大人の虫屋は子供の純粋な好奇心を失っていない変わり者であるとも言える。

養老、奥本、池田の虫屋三賢人は虫を捕る面白さがわかるには、12、3才位までの間に虫捕りに熱中することだという。この頃までに続けないと感受性の回路が閉じてしまうと言っており、音楽、味覚、言葉のアクセントなどと自然感覚というのは同じで、20才位まで虫をみせずにおくと、不気味という感じだけ受けて本当にカブトムシとゴキブリの区別がつかなくなるとも言っている。

還暦を祝い、退職してしまうと人生一巡の節目を終えたことになる。赤いちゃんちゃんこを着て幼児に生まれ変わってみてはどうだろう。虫捕りの経験のない者も孫に虫捕りを教えるとかの口実をつけて、捕虫網を握ってははどうだろう。音楽、絵画、俳句、舞踊など風雅の道に進むのも素晴らしいのだが、上手下手を気にせずに行ける虫捕りに一寸手を出してみられては。捕虫網を手にするのは様にならないという自意識を脱ぎ捨てて。

孫のために虫を捕ってやろうと小金井公園でオンブバッタなどを捕っていたところ、通りがかりの中年男性が「虫、捕ってんですか」と怪訝な口調で問いかけてきた。「ええー、孫にバッタを」と返答した。問われた瞬間、無意識の内に幼い子供のように虫捕りに没入していることに気付いた。雑草の緑に同調した小さなバッタを凝視し、網を素早く振り切って捕る。精神は振り下ろす網とバッタに集中していた。こんな充実感はけだし久し振りのものであった。

(了)

(注) 串田孫一= 1915年生まれ 89歳で逝去。詩人、哲学者、随筆家で中学時代から登山を始める。

登山や植物など自然の風物をめぐる詩的な随想、「山のパンセ」岩波文庫など多数執筆。

参考図書=「どくとるマンボウ昆虫記」北杜夫、新潮文庫昭和41年刊

「三人寄れば虫の知恵」養老孟司、奥本大三郎、池田清彦鼎談、新潮文庫平成13年刊